

## 《書 評》

村 井 明 彦 著

### 『グリーンスパンの隠し絵』 上・下

2017年 名古屋大学出版会

本書は日本人の手になる初めての本格的なアラン・グリーンスパン研究である。上下2巻、全体で560頁になんなんとする大作、しかも題名は『グリーンスパンの隠し絵』と、なにやらミステリーもどきで関心をそそる。はじめに本書の構成と内容を簡単に紹介すれば、次のとおりである。

#### 目次

#### 第Ⅰ部 グリーンスパンのアイン・ランド・コネクション

第1章 我あり、ゆえに我思う

第2章 中央銀行を嫌う中央銀行家の肖像

第3章 グリーンスパンの資本理論

補論 二つの経済学

#### 第Ⅱ部 ワシントンでの21年間

第4章 CEAと臨床経済学

第5章 大平準

第6章 「根拠なき熱狂」講演の根拠 (以下下巻)

補論 政策適用による経済学の科学性の検証

#### 第Ⅲ部 第二次大恐慌と中央銀行制の限界

第7章 第二次大恐慌

第8章 企業の固定資本投資と擬似金本位制

第9章 中央銀行のパラドクス

補論 現代を近代より退行させた大恐慌

第Ⅰ部ではアラン・グリーンスパンの思想形成過程が描かれる。第1章にはアイン・ランドが、第2章にはオーストリア学派が登場する。そのうえで第3章では、ランド派とオーストリア学派の影響のもとにグリーンスパンが「リバタリアン」として自己形成していく過程が描かれる。「リバタリアン」とは、筆者によれば、広義には「個人主義的自由主義者」のことである。彼らは個人を尊重するがゆえに国家の介入を嫌う点で「リベラル」と対立する。では「リバタリアニズム」とは何だろうか。筆者は正面からこの問いに答えずに、アイン・ランドとルートヴィヒ・フォン・ミーゼスのアメリカ的融合から話を始める。結果として、「リバタリアン」を自称するミルトン・フリードマンなどのシカゴ学派や、フリードリヒ・ハイエクやヨゼフ・シュンペーターなどのオーストリア系経済学者はふるい落とされ、筆者の念頭にある狭義の「リバタリアニズム」が浮かび上がってくる。それはランドとミーゼスの出会いから生まれた経済学批判であり、国家による経済への介入を厳しく拒否する立場から、ついには中央銀行の不要論に行き着く。中央銀行こそは金の裏付けのない紙幣を乱発することによって経済の安定を脅かす元凶であり、経済不況を免れるためには、これを廃止して金本位制を復活するほかないというのである。

第Ⅱ部では、ランドとミーゼスの融合を継承する「リバタリアン」として中央銀行制度に批判的なグリーンズパンが、ワシントンに進出して成功するまでの21年が描かれる。第4章にはフォード政権のもとでCEA（経済諮問委員会）の委員長を務めたグリーンズパンが登場する。第5章にはレーガン政権とブッシュ（父）政権、さらには民主党のクリントン政権のもとでFRB（連邦準備制度）の議長を務め、インフレなき成長の「大平準 Great Moderation」を現出したグリーンズパンが登場する。「大平準」とは、筆者の定義によれば、「1990年代にマクロ経済指標の変動性が目立って低下して経済安定が実現した現象」（p.261）のことである。第6章では、中央銀行に批判的な「リバタリアン」が中央銀行の総裁になるという矛盾する行為をどう受け止めるか、グリーンズパンが「根拠なき熱狂」という言葉を使ったことで有名な講演をもとに、著者の見解が披露される。

第Ⅲ部では、2008年の経済危機とその後の処理をめぐるグリーンズパンの思想と行動が考察される。第7章では、著者が「第二次大恐慌」と呼ぶ「リーマン・ショック」がなぜ起こったかが検討される。第8章では、その原因としてグリーンズパンをもってしても防げなかった制度の失敗が指摘される。第9章では、すべての原因が中央銀行制度にあることが確定される。

三部のそれぞれには最後に補論が置かれている。補論とはAppendixというほどの意味だろうが、本書の3つの補論にはそれ以上の意味がこめられている。これを読めばミーゼスの経済学とアメリカの金融史について読者の理解が一段とすすむことが期待されているのである。それだけに補論の占めるページ数の多さは尋常ではない。

アラン・グリーンズパンは1987年から2006年まで5期18年半にわたってFRBの総裁を務めた人物だが、歴代総裁のうちで彼ほど多くの批評にさらされた例はない。毀誉褒貶、いろいろな評価があるなかで、本書は明確にグリーンズパンを支持する立場をとっている。

本書の特徴は、グリーンズパンを一貫した「リバタリアン」として規定するところにある。「リバタリアン」である以上、グリーンズパンが金本位制の廃止に不満を抱き、中央銀行制度の解体を希求するのは当然のことである。しかし、そのグリーンズパンがFRBに入り、総裁になって、アメリカの経済の舵取り役として輝かしい成功を収めることになった。これを「リバタリアニズム」の放棄とみるか、それとも「リバタリアン」の勇気ある挑戦とみるか、本書が後者の立場を選択したのは、グリーンズパンは「リバタリアン」であり続けなければならなかったからである。

しかし、「リバタリアン」が中央銀行で采配をふるうことの矛盾を「リバタリアン」の勇気ある行動によって帳消しにするのは簡単なことではない。この課題を著者はどのように解明し、読者の納得を得ようとするのだろうか。

グリーンズパンの行動は、評論家としてではなく、インサイダーとして自由市場資本主義の発展に尽くそうと心に決めた結果なのだと、筆者は言う。グリーンズパンは、現行法が誤りであると知りつつ、現行法の範囲内で自らの硬い信念と現行法を器用に両立させるように政策を推進したのだ、というのである（p.360）。現行法とは、連邦準備法と、連邦準備制度に物価の安定と雇用の確保を義務づけたハンフリー・ホーキンス法のことであり、硬い信念とは「リバタリアン」として金本位制を最善の制度と信じて疑わないことであろう。

ここで筆者が取り出すのは、「擬似金本位制」という概念である。筆者によれば、「擬似金本位制」とは、引き写された「金本位制」のことである。「引き写す（replicate）」という言葉を使ったのはグリーンズパンだが、これをもとに「擬似金本位制」という概念を作り出したのは著者の独創である。それはあたかも金本位制が存在するかのように想定して金融政策を行うこと、つまり市場に任せて余計な介入を極力行わないようにすることである。具体的には、（1）極度に大規模で高い雇用を目指した政府赤字を出すべからず、出せばインフレと景気後退を招く。（2）貨幣供給増を手にもえない量にすべから

ず、すればインフレを生み出す。他方それをあまりに急激に引き締めるべからず、すれば景気後退を生じる。(3) 経済が活況を呈しているもとで物価・賃金・に硬直的な天井を設けるべからず、設ければ破綻する (p.460)。以上三つの「べからず」が「擬似金本位制」政策の要諦となる。

金本位制のないところで金本位制があるがごとき政策を行うのは、グリーンズパンにしかできない芸当に違いない。しかし、いかなる思索と技倆といえども実践の場を得ることなしに成果を発揮することはないから、グリーンズパンの中央銀行入りは「擬似金本位制」を試すまたとないチャンスであった。結果は上々、グリーンズパンが総裁の座にある間にアメリカ経済は一度も不況に陥ることがなかったのである。筆者はこれを「擬似金本位制」の成果、つまりは「リバタリアニズム」の勝利と受け止める。「リバタリアニズム」の勝利を重視すれば、「擬似金本位制」を実験するためにあえて中央銀行に乗り込んだグリーンズパンの行為は「リバタリアニズム」への裏切りとは限らないのである。

しかし、このような議論を自他共に「リバタリアン」を名乗る人々が受け入れるだろうか。彼らは、それではグリーンズパンはいずれ本当の金本位制に戻ることを望んでいるのかと問い、グリーンズパンがそれをありえないことと考えていると知ると、彼から「リバタリアン」の肩書きを引き剥がそうとする。マレー・ロスバードは、本書にあるように、「グリーンズパンは長年共和党のエコノミストの他の人たちの大半と同じく保守的なケインズ派であり、今日では民主党陣営のリベラルなケインズ派とほとんど見分けがつかない」と判定している (p.420)。またロン・ポールはグリーンズパンを「プラグマティスト」だと決めつけた上で、アイン・ランドは「プラグマティスト」が大嫌いだったと付け加えている (ロン・ポール『連邦準備銀行を廃止せよ』p.134)。

このような批判を意識してか、著者はグリーンズパンがFRBにおいてもいかに「リバタリアン」であり続けたかを証明しようとする。そのために筆者が注目したのが、グリーンズパンが1996年に行った「民主主義社会における中央銀行の課題」と題する講演であった。

この講演を著者は「根拠なき熱狂 irrational exuberance」演説と呼び、第6章のすべてをこれに当てるなどして、大変な力の入れようである。しかし、評者は正直言って辟易した。これが相手を貶めることによって聳肩を盛り立てるネガティヴな手法なのだろうか。グリーンズパンは講演の冒頭でウィリアム・ブライアの「金の十字架演説」に言及しているが、これを受けて著者が繰り出すインフレ主義者批判の激しいこと、ブライアはどうとう「猛々しく吠えて客を喜ばせるので一国の影の支配者に使役されたライオンが政治サーカスの舞台上で巧みに演技をする。しかし楽屋に帰ると自分の臆病さで自己嫌悪に陥り涙を流す。横合いから脳みそはあるのかと皮肉られもする」(p.352) 手合いにされてしまうのである。

6章の後半で著者が展開するのは「根拠なき熱狂」の解釈である。講演でグリーンズパンは、折角の実績ある政策が「根拠なき熱狂」という得体の知れない突き上げによって一挙にひっくり返される危険に言及し、中央銀行は経済現象の動きに常に細心の注意を払って非常時に備えなければならないと述べている。これはそれまでの成功に奢ってはいけないうのグリーンズパンの自戒の弁とも読めるが、筆者はこれを来たるべき金融恐慌への密かな予告とみる。周囲の誰ひとりとしてグリーンズパンの予告に気づかず、予防措置を怠ったというのである。

2008年に「リーマン・ショック」が起こった時、すでにグリーンズパンはFRBの議長を退任していたが、在職中の低金利政策と金融恐慌の関係を問われて議会の公聴会に証人として召喚された。彼は金融引締めを誤ったと述べたが、同時に、この100年に一度の金融恐慌は、「根拠なき熱狂」とは別次元の要因によって引き起こされたとの認識を示した。証券化とサブプライム証券を受け入れるグローバルな市場の成長に従来の金融モデルでは対応しきれなくなったというのである。(U.S. House, *Hearings, "The Financial Crisis and the Role of Federal Regulation"*, 110-2, 2008)。これは「擬似金本位制」で乗り切ることのできない状況が生まれたということではないだろうか。

しかし、著者はグリーン스パンの証言が「リバタリアン」の敗北宣言と受け取られることに断じて反対する。そのために第Ⅲ部では、リーマン・ショックの原因をめぐって中央銀行の歴史とそれにまつわる経済学の歴史が検討吟味される。著者は言う「今次の恐慌に関する原因分析を学派横断的に概観すると、ほぼ大恐慌の前例が再現されていることに気づく。すなわち、マルクス派やケインズ派などの左派は行き過ぎた投機を糾弾して金融機関の政府救済とリフレ政策を説き、マネタリストは危機後のマネーサプライが十分な量を備えるように説き、オーストリア学派は2000年代初めのFRBの金利政策に原因を求めて今後の放任を説いている」(p.395)。著者はいずれの説にも反対である。そのうえで著者が恐慌の真犯人として特定したのは、ほかならぬFRBであった。FRBは現行法によって縛りをかけられている限り、世界の中央銀行の役割を果そうとすればするほど信用の膨張に陥らざるを得ないというのである。現行法とは、1978年に成立したハンフリー・ホーキンス法のことであり、縛りとは同法がFRBに価格の安定と最大雇用の追求を義務づけていることである。著者は言う「現代では物価安定論という無根拠な信仰のごとき議論が政策の基本的な前提系列の筆頭に陣取っており、それを行うには実物的生産活動の拡大ペースに合わせて貨幣を注入しなければならない」。しかし、物価安定論をFRBに押し付けているのはハンフリー・ホーキンス法という現行法であることをFRB入りする時のグリーン스パンは知っていたはずである。現行法が誤りであると知りつつ中央銀行入りをしたグリーン스パンが、結局は現行法によって脚をすくわれたということなのだろうか。そうであるとすれば、これは「中央銀行のパラドクス」(p.505)というよりは、「リバタリアン」グリーン스パンのジレンマではないだろうか。

ハンフリー・ホーキンス法は1946年雇用法の精神を継いで、完全雇用と調和ある成長の達成を政府の責務と定めている。そのためにFRBには価格の安定と最大限雇用の確保という役割が与えられた。著者のように金本位制と福祉国家制を対抗させれば、ハンフリー・ホーキンス法は明らかに後者に属するが、そのもとで「大平準」を実現したからといって、「リバタリアン」が胸を張ることができるのだろうか。この点で評者の見解はロスバードやロン・ポールに近い。グリーン스パンはFRBに赴いた時、すでに「リバタリアン」という物指しで測れる存在ではなくなっていたのではなかろうかと思うのである。

幸い、グリーン스パン氏はまだ健在のようである。筆者はこの「擬似金本位制」の議論を一度グリーン스パン氏に披露してみてもどうだろうか。そのうえで著者には改めて「リバタリアニズム」について書いて欲しい。今度は「リバタリアン」としてではなく、一人の優れた経済思想家として、筆者の稀に見る筆力と独特の分析力があつたからこそ、評者は560ページの長丁場に耐えることができたのであつた。

〔西川 純子〕

書評執筆者

西川 純子 獨協大学名誉教授